

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ネルヴァル 《Angéliqueの手記》 をめぐるふたつのコンテキスト
Author(s)	善家, 明宏
Citation	フランス文学 , 17 : 21 - 29
Issue Date	1989-05-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040966
Right	
Relation	



ネルヴァル《Angéliqueの手記》をめぐる ふたつのコンテクスト

善 家 明 宏

I. 《Angéliqueの手記》をふくむふたつのテキスト

ここで《Angéliqueの手記》とよぶのは、実在の人物アンジェリック・ド・ロングヴァルが書き残した手記のことである。この手記には、アンジェリックの駆け落ち、その途中でアンジェリックが被った数々の不幸、恋人の死と、フランスへの帰還が語られる。この手記は、*Le National* に1850年10月24日から12月22日まで27回にわたって連載された *Les Faux Saulniers, Histoire de l'Abbé de Bucquoy* と1854年に出版された *Les Filles du Feu* に収録された *Angélique* のふたつのテキストに挿入されることになる。

というのも、*Angélique* は、もともと *Les Faux Saulniers* をその原形としているのである。すなわち、*Les Faux Saulniers* は大きく分けるとふたつの部分から成り立っており、その前半部は、ビュコワ神父の本の探究に費やされる。*Le National* の編集長にビュコワ神父の物語を約束したものの、そのための資料となる神父の本を手に入れることのできない語り手は、その間に彼に起こった出来事、図書館巡り、その途中で見つけたビュコワ神父の大伯母アンジェリックの手記、このアンジェリックの故郷を尋ねる旅となる語り手のヴァロワ旅行を報告する。後半部では、この本を手に入れた語り手によってビュコワ神父の物語が語られる。そして、後に *Les Faux Saulniers* は、その前半が *Angélique* として独立し、一方後半部は、*Histoire de l'abbé de Bucquoy* として *Les Illuminés* (1852年) に収録されることになったのである。

アンジェリックの残した告白の引き写しである《Angéliqueの手記》にはまったく変更が見られないとはいえ、*Les Faux Saulniers* と *Angélique* は、かなり異なったものとなっている。この小論では、不変化要素である《Angéliqueの手記》とこれを取り巻くふたつのテキスト *Les Faux Saulniers* と *Angélique* の関係を検討するものである。

II. ふたつのテキストの異同

今述べたような成立過程を辿った *Angélique* は、いわばビュコワ神父の物語のプロローグ、ビュコワ神父の物語を掲載できるまでの穴埋めの記事に過ぎず、また *Les Faux Saulniers* では後半に語られる神父の物語が切り棄てられているため、読者がそこに、不整合な断片の寄

せ集め、しりきれとんぼ、すなわちある研究者が指摘するところの《une forme relâchée》¹⁾しか見出せないのも無理はないと言えるであろう。それに対して、そもそも語り手がビュコワ神父の物語を題材として選んだ理由が小説＝フィクションを新聞に掲載することを禁じた当時の法律にあったように、*Les Faux Saulniers* は、1850年当時の政治情勢、権力の濫用に対する批判がその背景にあり、この政治的要素が *Les Faux Saulniers* 全体を結びつけている。*Angélique* における統一性、首尾一貫性の不在は、*Les Faux Saulniers* から *Angélique* に到る間にネルヴァルがこの政治的要素を大部分削除してしまったことにその原因があると言える。

Angélique では削除された断片の1例として、奸計によって民衆を欺くスパルタの専制君主の話があるが、そこには当時のフランス社会に対する語り手のシニクな視線が読み取れる。

Ce tyran-là avait de l'esprit, —et sans relire son histoire, je juge qu'il a dû se maintenir longtemps au trône de Sparte, —ville qui n'était alors républicaine que de nom; —une république gouvernée par des princes! . . .²⁾

この名だけの共和国、《princes》によって支配される共和国スパルタに、フランス第2共和国の姿が二重写しになって見えてくるのである。

さらに、この話のすぐ後に、これもまた *Angélique* においては削除される、いかさま薬売りの話がある。この薬売りは、客の目の前で三羽の鳥を眠らせ、薬が売ればこの鳥を再び目覚めさせると口上を述べるのである。しかし、実際この鳥は、死んでいるかあるいは剥製の鳥に過ぎず、薬売りが口のなかに隠した笛を吹くことによってあたかも生きているように見せ掛けているのである。この話を紹介した後、語り手は次のように述べるのであるが、その言葉の裏に隠された意味はかなり辛辣なものである。

Ne me reprochez pas le peu de sérieux d'un tel récit: il peut rencontrer quelques analogies dans le travail des partis politiques. Que de fois on a pipé les assistances crédules avec des oiseaux morts, —ou empaillés!³⁾

この鳥に Jacques Bony は、ナポレオン、第1帝政の象徴としての鷲を見ているのであるが⁴⁾、それは当時の読者一般においてもまたそうであったに違いない。すなわち、ここで薬売りによって暗示されている人物とは、その当時反動色を強めつつあった le prince-président ルイ＝ナポレオンその人であり、彼はナポレオン1世の幻想を見せて国民を欺いているに過ぎない、と語り手は言っているのである。

ここではふたつの例しか挙げなかったが⁵⁾、*Les Faux Saulniers* においては、今述べたような語り手による1850年当時の政治、さらには権力の濫用に対する批判があらわにされ、そ

れが、「王たちと闘い、今も常に謀叛の疑いをかけられている武門の名家の1人《Je suis un de ces fils de grandes familles militaires qui ont lutté contre les rois, et qui sont toujours soupçonnés de rébellion.》」⁶⁾であり、「絶対王政に対して、またそれが惹き起こす弊害に対して抗議する《je suis de ceux qui protestent contre la monarchie absolue et contre les abus qu'elle entraîne. . .》」⁶⁾ビュコワ神父のバスチーユ脱獄の物語と相呼応している。しかしながら、ネルヴァルは、このような政治批判に関連した断片の大部分を *Angélique* から除いてしまったのである。

III. 解釈の問題

Les Faux Saulniers から *Angélique* においてネルヴァルがなした政治的要素の削除によって起こる、このふたつのテクストの解釈の変化を次に見てみよう。

Les Faux Saulniers, *Angélique* の両方に、サンリスで語り手が身分証明書の不携帯によって憲兵に逮捕される話があるが、*Les Faux Saulniers* では、この話に関連させて考古学者の逮捕の話が引き合いに出される。この考古学者は、メモを取りながら13世紀の教会を観察していたというだけで憲兵に疑われ、彼もまた身分証明書を持っていなかったため逮捕されパリまで囚人馬車で護送されてしまうのである。このふたつの逮捕の話から、*Les Faux Saulniers* の語り手は、次のような結論を導き出す。

Cette anecdote (. . .) peut faire comprendre combien il est dans le caractère du fonctionnaire français d'abuser de l'autorité; —c'est ce qui amène peut-être des réactions en sens contraire⁷⁾.

さらに、ここで言われる権力の濫用に対する反動という観点から、2月革命における放火や私的略奪が語り手によって説明されるのである。

このように、*Les Faux Saulniers* では、語り手の逮捕は考古学者の逮捕と結びつき権力の濫用の実例として政治的に解釈されるのだが、*Angélique* においては考古学者の話が削除されることによって、語り手の逮捕は別の解釈が可能になる。語り手のヴァロワ旅行は、そもそもルソーが書き留めた歌によって思いつかれる。

Celui plus je ne suis que j'ai jadis été,

Et plus ne saurais jamais l'être:

Mon doux printemps et mon été

Ont fait le saut par la fenêtre, etc.

Cela m'a donné l'idée de revenir à Paris par Ermenonville, (. . .)⁸⁾.

この歌を見つけたことによって語り手は、アンジェリックの故郷を尋ねる旅の途中にルソーの墓のあるエルムノンヴィルに立ち寄ることを思いつくのである。しかし、こうした口実の裏に、語り手のヴァロワ旅行の真の理由が隠されている。すなわち、「二度と戻ることのない過去の私」というこの歌のテーマが、語り手を彼の幼年時代が過ごされたヴァロワの地へと導くのである。このため、アンジェリックの故郷を尋ねる旅、ルソー巡礼の旅は、また同時に語り手自身の失われた「過去の私」とその思い出を尋ねる旅ともなるのである。このことは、語り手の次の言葉に明確に表れている。

Quoi qu'on puisse dire philosophiquement, nous tenons au sol par bien des liens.
On n'emporte pas les cendres de ses pères à la semelle de ses souliers, —et le plus pauvre garde quelque part un souvenir sacré qui lui rappelle ceux qui l'ont aimé.
Religion ou philosophie, tout indique à l'homme ce culte éternel des souvenirs⁹⁾.

さらに、この旅がルソーの歌にある過ぎ去った春と夏の後にやって来る現在の私を象徴する秋に行われること、とりわけ11月1日とその翌日、すなわち思い出のための特別な日 la Toussaint (万聖節) と le jour des Morts (万霊祭) になされるということは「過去の私」の探究という語り手の意図を暗に示唆していると言っていいだろう。従って、語り手が「私は、7年間この地方で暮らしましたし、まだここに地所も残っています《J'ai vécu sept ans dans ce pays; j'y ai même quelques restes de propriétés...》」¹⁰⁾と憲兵に説明するにもかかわらず、疑わしい人物と見做され身分証明書を持っていないという理由で逮捕されてしまう出来事は、語り手と彼の幼年時代とのつながりを否定するものと言えるのである。第三者による否定の後には、今度は語り手自身によって幼年時代と現在の断絶が強調される。ヴェールからダマルタンに行く途中語り手は、親しいはずであった土地で道に迷ってしまい、自分の記憶に裏切られてしまうのである。

すなわち、*Angélique* において語り手の逮捕は、道に迷ってしまう話とともに、「過去の私」の喪失、求める対象の空白を浮かび上がらせているのである。また、先に述べたように、ビュコワ神父の物語が切り放された *Angélique* は、ビュコワ神父の探究の物語、言い換えるならビュコワ神父という空白が織りなす物語となっている。そして、*Angélique* 全体を支配する「永遠に逃れ去ろうとする《éternellement fugitif》」¹¹⁾ビュコワ神父の探究は、語り手によってこの「過去の私」という内的な探究に重合わされるのである。

(...) les Bucquoy, —dont le nom a toujours résonné dans mon esprit comme un souvenir d'enfance¹²⁾.

さらに、もうひとつの例を見てみよう。*Les Faux Saulniers*, *Angélique* 両方に、ルソー

とアンリ 4 世の伝説が紹介されている。この伝説では、ルソーとアンリ 4 世が恋人を巡るライバル関係にあり、嫉妬した王がルソーを殺害したことになるのであるが、この伝説について語り手は、次のようにコメントしている。

Voilà pourtant comment se forment les légendes. Dans quelques centaines d'années, on croira cela. (. . .) On a confondu déjà, —à deux cents ans d'intervalle, —les deux souvenirs, et Rousseau devient peu à peu le contemporain d'Henri IV. Comme la population l'aime, elle suppose que le roi a été jaloux de lui, et trahi par sa maîtresse, —en faveur de l'homme sympathique aux races souffrantes. Le sentiment qui a dicté cette pensée est peut-être plus vrai qu'on ne croit. Rousseau (. . .) a ruiné profondément l'édifice royal fondé par Henri. Tout a croulé. —Son image immortelle demeure debout sur les ruines¹³⁾.

伝説についての語り手のこのコメントは、*Les Faux Saullniers* と *Angélique* では違った機能を果たしている。*Angélique* では削除されるのだが、*Les Faux Saullniers* では、この伝説の前にもアンリ 4 世が登場している。

L'histoire de France a été cruellement défigurée depuis plus de deux siècles, grâce à l'influence de ce principe de monarchie absolue qu'ont tenté d'établir les descendants du Béarnais. —Il fallait, pour les écrivains, se soumettre à cette convention, ou s'en aller écrire hors de France.—Les écrivains ont fini par rester, et les rois absolus sont partis¹⁴⁾.

Les Faux Saullniers で政治批判をなす語り手の状況（語り手対ルイ＝ナポレオン）が、ここでは絶対王政のもとでの作家の立場に重合わせられ、ルソーとアンリ 4 世の伝説においては、民衆の味方であり絶対王政に対する反逆者の代表者としての作家ルソーと専制君主の祖であるアンリ 4 世の対立に転換されているのである。

ところで、語り手が求めるビュコワ神父は、彼の名前の綴りの不確かさ、別のビュコワ (Jacques de Bucquoy や le comte de Bucquoy) の出現、警察の記録の「自称デュ・ビューコワ伯爵 (le prétendu comte du Buquoy)」¹⁵⁾ という記述によってその実在性が疑問視される。そして、その周りに図書館における小説（虚構）と歴史（真実）の分類の杜撰さ、ル・ピルール事件の曖昧な証言による事件の真相の謎などが配置され、真実に対する疑いの補強材料となっている。*Angélique* では、政治批判者という語り手の立場は *Les Faux Saullniers* におけるほど明確にはされず、また先の引用で示された作家と権力者の対立が削除されることによって、この伝説は歴史的眞実に対する感情の優位、すなわち今挙げた補強材料のひとつと見做

すことができるのである。また、この伝説のすぐ後で言及されるルソーの墓の彼方に見える「存さぬ真実の女神の大理石の神殿〈le temple de marbre d'une déesse absente, —qui doit être la Vérité〉」¹⁶⁾は、語り手が求めるビュコワ神父の *authenticité*、さらには、このビュコワ神父に重合わされる「過去の私」の *authenticité* の空白を表すシンボルと解釈することができるであろう。

このように、ネルヴァルが行った断片の削除は、*Angélique* において単に語られる材料が減少したというだけではなく、ふたつのテキストのシステムが異なった機能を果たすことによって、強調されるモチーフの変更、解釈の方向づけの変更をも引き起こすのである。そのため、*Les Faux Saulniers* では鮮明な政治批判の背後で目立つことのなかった「過去の私」という内的探究とその対象の空白というテーマが、*Angélique* においては前面に浮かび上がってくるのである。

IV. 〈Angélique の手記〉とふたつのコンテキスト

Les Faux Saulniers から *Angélique* への改編は、またこれが取り巻く〈Angélique の手記〉の解釈の変更を促す。

Les Faux Saulniers における語り手の政治批判、絶対王政に対する反逆者ビュコワ神父のバスチーユ脱獄の物語という政治的文脈は、〈Angélique の手記〉から、厳格な大貴族である父親の権威に反抗し、豚肉屋の息子と駆け落ちする「大胆なガウンを纏った反逆者〈l'opposition même en cotte hardie〉」¹⁷⁾というアンジェリックその人の性格を浮き彫りにしていると言うことができよう。

一方、*Angélique* における内的探究と、その対象の不在という文脈において〈Angélique の手記〉を見るなら、手記も自ずとその浮き彫りとされる意味を変えてくる。アンジェリックとラ・コルビニエールの駆け落ち、アンジェリックが被った様々な不幸な出来事の原因は、アンジェリックの最初の恋に見出すことができる。アンジェリックに恋文を渡そうとした彼女の最初の恋人は、その現場を父親に見つかってしまい殺害されてしまう。この出来事が、彼女に愛というものを啓示するのである。

Le déchirement que cette mort fit éprouver à Angélique lui révéla l'Amour. Deux ans entiers elle pleura. Au bout de ce temps, ne voyant, dit-elle, d'autre remède à sa douleur que la mort ou une autre affection, elle supplia son père de la mener dans le monde. Parmi tant de seigneurs qu'elle y rencontrerait elle trouverait bien, pensait-elle, quelqu'un à mettre en son esprit à la place de ce mort éternel¹⁸⁾.

アンジェリックにとって愛という観念は、この最初の恋人の死であって、ラ・コルビニエールに対して抱く恋は、永遠で消えることのない死を埋め合わそうとする虚しい試みに過ぎ

ないのである。すなわち、アンジェリックは、手記のなかで何度もラ・コルビニエールに対する恋を肯定しているにもかかわらず、語り手、そしてアンジェリックの従兄弟のグーサンクールは、それぞれこの恋をラ・コルビニエールが彼女に使った《charme》、《magie》つまりは魔術のせいに行っているのである。従って、《Angéliqueの手記》は、愛という永遠に取り返しがつかない死が残した最初の空白が織りなす手記ということが言える。さらに、アンジェリックの逃避行の間、彼女の故郷に篡奪者があらわれ彼女にとってかわろうとする。アンジェリックは、ラ・コルビニエールの死後フランスに戻るのであるが、最終的には、この駆け落ちのせいでアンジェリックの名は家系図から消されてしまう。従って、《Angéliqueの手記》は、またアンジェリック自身の存在の空白を満たそうとする試み、言い換えるなら、アンジェリックの「過去の私」の存在証明の試みとも言えるのである。

V. 結 び

初めに述べたように、《Angéliqueの手記》はネルヴァルの創作によるものではなく、アンジェリック・ド・ロングヴァル自身の手記の引き写しに過ぎない。また、今述べたような《Angéliqueの手記》におけるふたとおりの解釈は、もちろん排他的なものでも絶対的なものでもない。確かに、《Angéliqueの手記》には、このようなふたとおりの解釈を可能にする要素が潜在しているのである。しかし、これらの潜在要素がどのような解釈を読者において顕在化するのかということを知るには、ネルヴァルの手による *Les Faux Saulniers*, *Angélique* におけるコンテクストを考慮に入れる必要があるだろう。ネルヴァルが *Les Faux Saulniers* を *Angélique* に改編する際、*Angélique* から物語の流れが壊れてしまわない範囲で極力政治的要素を削除したということは事実であるし、さらに *Angélique* が組み込まれている *Les Filles du Feu* というより大きなコンテクストを考えた時、権力者に対する反逆者としてのアンジェリックではなく、*Sylvie* の語り手の場合とよく似たアンジェリックの恋の性質に焦点が当てられているということは明らかである¹⁹⁾。このことは、ネルヴァルが、コンテクストをとおして読者の行う《Angéliqueの手記》の解釈をコントロールしているということを意味している。それはまた、《Angéliqueの手記》を引き写しながらもコンテクストという枠によってネルヴァルが、そこから新たな意味作用を生み出しているということである。このことは、ネルヴァルによく見られる citation の使用²⁰⁾や、既に発表されたテキストを利用し、あるいは更新しながら新たなテキストを再生産する創作手段²¹⁾などとともにネルヴァルにおける originalité の問題の再考を促しているように思われる。

註

1) Ross CHAMBERS, *Gérard de Nerval et la poétique du voyage*, Corti, 1963, p. 182.

2) Gérard de Nerval, *Les Faux Saulniers* (以下 *F.*と略) in *Œuvres complètes*, t. II,

Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 1984, p. 49.

- 3) *F.*, p. 52.
- 4) Jacques BONY, *Notice*, in *Œuvres complètes*, t. II, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 1984, p. 1315.
- 5) *Les Faux Saulniers* における政治性を論じたものには, Gabrielle MALANDAIN, *Nerval ou l'incendie du théâtre*, Corti, 1986, pp. 58—79.がある。
- 6) *F.*, p. 124.
- 7) *Ibid.*, p. 85.
- 8) Gérard de NERVAL, *Angélique* (以下 *A.*と略) in *Œuvres de Gérard de Nerval*, Garnier, 1966, p. 525. 以下 *F.*, *A.*に共通のものは *A.*のテキストによって示す。
- 9) *A.*, p. 535.
- 10) *Ibid.*, p. 534.
- 11) *Ibid.*, p. 511.
- 12) *Ibid.*, p. 532.
- 13) *Ibid.*, pp. 576—577.
- 14) *F.*, p. 82.
- 15) *A.*, p. 514.
- 16) *Ibid.*, p. 577.
- 17) *Ibid.*, p. 554.
- 18) *Ibid.*, p. 527.
- 19) *Sylvie* の語り手の Sylvie, Aurélie に対する恋は, Adrienne の思い出, すなわち Adrienne の不在が原因であり, この空白を語り手は, 他の恋で満たそうとする。しかし, 実際には Adrienne はその時すでにこの世にはいないことを語り手は, 最後に Sylvie から聞く。従って, *Sylvie* は, 二重の不在が織りなす物語となっているのである。
- 20) Cf. Michael RIFFATERRE, *Essais de stylistique structurale*, Flammarion, 1971, pp. 93—94. note (6).
 «Leur (des chansons du Valois) texte, il est vrai, est authentique, mais le cadre contextuel du récit nervalien fait des chansons (caractérisées formellement par l'absence de toute représentation d'auteur) autant d'images des sentiments exprimés par le récit (caractérisé formellement par des verbes à la première personne, donc par la représentation de l'auteur, de l'auteur comme personnage).»
 例えば *Angélique* にもあらわれるヴァロワの民謡は, ネルヴァルの他のテキストにおいても頻繁に用いられる。こうした「citation」は, 本文中に述べたルソーの歌と同じ役割を果たしていると言える。
- 21) Cf. Raymond JEAN, *La poétique du désir*, Seuil, 1974, p. 94.

«Le paradoxe est que d'un écrit sans cesse remanié, refondu, diversement exploité, sorte tout de même une œuvre originale.»